

『底が突き抜けた』時代の歩き方 523

「私」は「身体」の生命を拒否できるか - 映画『海を飛ぶ夢』

船員として世界を回り、自由を謳歌していた若きスペイン人ラモン・サンペドロは25歳の夏、岩場から海へのダイブに失敗して頭を強打し、首から下が不随の身となってしまう。それ以来、実家のベッドで寝たきりの生活になり、農場で懸命に働く兄のホセや、母親のような愛情でラモンに接するホセの妻マヌエラを始め、父や甥もさまざまな道具を作って、家族は献身的にラモンの世話をしてきた。しかし、家族の強い絆に支えられながらも、いや、支えられれば支えられるほど、失われた自由への希求も募り、ラモンはある決意を固めつつあった。事故から26年目を迎えた時、彼は自らの選択で人生に終止符を打ちたいという願望を表明する。しかし、カトリック信仰の篤いスペインでは、自殺は神に背く罪で、しかも身動きできない彼が死を選択するには誰かの手助けが必要になる。もちろん、彼の死に手を貸せば、自殺幫助の罪に問われる。

自分の決意を実行に移すために、ラモンは尊厳死を法的に支援する団体のジュネという女性に連絡を取り、裁判に訴えることにし、女性弁護士フリアの援助を仰ぐ。二年前に不治の病を宣告されていたフリアは、ラモンの人柄と明晰さに感銘を受け、生と死を真正面から見据える彼の姿に強く惹かれる。死を求める彼のテレビドキュメンタリーを観て会いにやってきた近所の子持ちの女性ロサが、「死ぬのは間違っている、逃げてはいけない」と言うと、ラモンはシニカルに「ただ自分の人生の意義とやらを見出したいために来たのだろう？」と答えるが、ロサはめげることなくたびたび彼の元を訪れる。

審理の準備のためラモンを再訪したフリアは、これまでの彼の半生についてインタビューを重ねるが、ラモンは船乗りだった時の話を語ることがためらい、当時の写真や思い出の品を見ることも嫌がる。だが、過去の思い出は封印された愛への渴望をも甦らせ、ラモンはフリアに強く惹かれていく。

自由になった自分が海岸をフリアと一緒に散歩して、唇を重ねる場面をベッドで夢見るラモンだが、その妄想直後には義姉に汚物処理の世話になる惨めさを味わっている。フリアは彼が書き留めた詩を読んで出版を奨める。その直後、フリアは発作で倒れる。足を引きずっていた彼女は早発性のアルツハイマーにかかっており、発作が起きるたびに体の自由を失い、脳の働きが退化していくことを宣告されていた。そのことに対する恐怖が、ラモンの「自ら死を選ぶ」という思いへとますます近づけていったのだ。フリアは見舞いにやって来たジュネに、仕事も夢も虚しくなる不安と絶望をぶちまける。そんな彼女にジュネはラモンの手紙を渡す。その中で彼はフリアへの愛を告白し、詩集の出版への意欲を語る。彼の言葉に希望を見出した彼女は、リハビリに懸命に打ち込む。

ラモンの訴えはバルセロナの法廷で却下され、そのニュースを報じるテレビで、ラモンと同じく体が不自由なカトリックの神父が、「ラモンが死を望むのは自分に注目してほしいからであり、家族の愛情が不足しているからだと思う」とコメントする。

その言葉に最も深く傷ついた、ラモンに献身的な義姉は後日、ラモンを説得するために車椅子で家に乗り込んできたその神父に、「残念ですが、義弟は愛情に包まれています。私は彼を息子のように愛しています」と痛烈な言葉を浴びせる。クリスマスの季節、ラモンの家に妊娠したジュネとその夫だけでなく、車椅子に乗ったフリアも戻って来る。彼女はそのままラモンの家に滞在して、詩集を完成させる作業に取り組み始める。ラモンの元を訪れるロサは、そんな二人を悔しげに見つめている。ラモンとフリアは今やはっきりと自分たちが死という、分かちがたい深い絆で結ばれているのを感じていた。恋するフリアに「君に触れることもできない」と呟き、独りベッドで「なぜオレは他の人々のように、自分の人生に満足できないんだ」と呻いていたラモンだったが、彼の夢が現実になったかのような口づけを交わした後、フリアはラモンに自分も死の決意をしていることを告げ、彼に手を貸すことを約束する。二人は詩集が出版される日を、旅立ちの日と決める。

ラモンにはもはや裁判で闘う必要はなかったが、後に続く人のためにというマヌエラの言葉に心を動かされ、嫌っていた車椅子に乗って、地元の法廷に出かけて行く。だが、法廷はラモンに発言の機会すら与えず、彼の訴えは法の壁に阻まれる。そのこと以上に衝撃的だったのは、理解のある優しい夫によって死の決意を翻したフリアからの手紙だった。その手紙は郵送されてきた彼の本に同封されており、その夜、絶望したラモンは夜中に轟き渡るような声で号泣する。翌日、ラモンを訪ねてきたロサが「手を貸してほしい？」と、思いがけない言葉を口にする。彼のために自分が一体なにをしてあげられるのかについて考えていたロサは、裁判の日、ラモンから「僕を本当に愛しているのは、死なせてくれる人だ」と告げられ、彼の望みをかなえることで、自分の愛を全うする道を選ぼうとしたのだ。

旅立ちの場所として、ロサの住むボイロの海の見える部屋が選択される。ラモンが還らぬ旅に出発するその日、家族たちの心は揺れ動く。父は息子を失う悲しみにじっと耐え、兄は最後の瞬間まで死の選択に反対し続ける。マヌエラは涙をこらえ必死で笑顔を浮かべようとする。甥は去って行く車の後をどこまでも追いかけて行く。車はボイロに到着し、海の見える部屋で、ラモンは自分の死に手を貸した人々が罪に問われないようビデオに告白を収め、静かにロサがつくった青酸カリの入った水を飲み干す……。ラモンはようやく念願の自由を手に入れ、「海を飛ぶ夢」をかなえていく。一方、フリアは痴呆症の進行によって、ラモンの記憶を失くしてしまう。

映画『海を飛ぶ夢』のストーリーである。ラモンを演じたのは、『夜になるまえに』（00年）でキューバの亡命詩人レイナルド・アレナスを演じた36歳のハビエル・バルデム。監督は『オープン・ユア・アイズ』（97年）、『アザーズ』（01年）で知られる3

3歳のアレハンドロ・アメナーバルで、この映画はベネチア映画祭の審査員特別賞とヤング・シネマ賞を筆頭に、ヨーロッパ映画賞など多くの賞を受賞する。映画の主人公、ラモン・サンペドロは実在の人で、彼が実際に死ぬ場面については、『キネマ旬報』（05年5月上旬号）で次のように記されている（文＝和久本みさ子）。

《ラモンは、自ら死を選ぶ直前、スペインのテレビに、なぜ死を選ぶのかを語り、クスリを飲んで苦しみつつ死ぬすべてを撮影したビデオを送り、その前半がオンエアされたのである。

1998年、ラモンが視聴者に向けて語る映像を、多くのスペイン国民が観た。アメナーバル監督もハビエル・バルデムもその映像を観たのである。が、四肢を動かさぬラモンがなぜ、死ぬために青酸カリを飲むことができたのか。アメナーバル監督は語る。「僕もこのテレビを観ていた。そして、彼の人生に興味を持った。他の人と同じようにね。彼はスペインでは有名人になっていた。誰もがラモンのことを知っていた。後に映画を撮ることになって、オンエアされなかったその時の映像の後半部分も観て、そこに苦しみながら死を迎える彼が映っているのを知ったけれど、初めの段階では、僕は彼の映画を撮ろうとは思わなかった。が、彼がどれほど過酷な人生を生きただかに興味を持って、死後、出版された『Letters from Hell』を読んだんだ。彼が口を使って書いたという本だ。この本には、「生と死」に関する深い哲学がこめられていた。そして、生から死へ、「一線を越えたい」と言う彼のメッセージが伝わってきた。この本はどれだけ自分の人生を愛しているかを人々に問いかけてきた」

同じ雑誌に三井美奈も、書いている。

《「私の人生は尊厳とは無縁でした」。こう言い残し、ストローで青酸カリを吸った。白目をむき、あえぎ声を漏らす。「もうすぐだ」……。

98年3月、スペインのテレビ『アンテナ3』の夜のニュースに、衝撃のビデオ映像が流れた。30年近く寝たきりだったラモン・サンペドロが、ビデオカメラの前で服毒自殺した数分間がそのまま放送された。このころ新聞社の特派員として渡欧した私は、映像の生々しさにたじろいだ。》

「ベッドの上で老いるだけの人生に意味はあるか」という問いを人々に突きつけたラモンは、《死ぬ権利を求めて患者自身が闘争》するという前例をつくることによって、7年前、《安楽死の概念を変えた》のである。《国が安楽死を禁じ、「苦痛だけの人生」を続けろと強要するのは、隷属の禁止を定める人権条約違反であり、人権侵害ではないか》という彼の告発は、《英国やベルギー、フランスで、患者たちが相次いで法廷や政府に安楽死要求を突きつけ》る気運を促し、《02年にオランダとベルギーが相次いで安楽死法を施行した。欧州で安楽死は人工妊娠中絶や同性婚と同様、保守的なキリスト教の価値観に対抗し個人の自決権を問う問題と位置づけられるようになった。》

しかし、映画は死ぬ権利を求めつづけるラモンが女性との甘美な交渉にも恵まれるなかで、けっして孤独で惨めな患者ではありえなかった点をもくっきりと描写する。

《ラモンは、肉体の痛みに襲われているわけではない。家族の愛情も介護の手もある。口を使って詩を書き、自己表現のすべもある。彼の死は人生からの離脱、逃避であり、映画の中で司祭が「尊厳死というのは詭弁。自殺とはっきり言え」と憤るのもうなずける。

死の要求は、周囲の愛情を拒絶する。兄ホセは、愛する弟に生きて欲しいと心から願っている。「なんでお前は、俺たちを振りきって死にたがるのか」。ホセの悲しい叫びは、胸に響く。》

映画パンフの中で、『アザース』では、ダークな死の世界にいる一家のビジョンを描きました。そして今回の『海を飛ぶ夢』では、“死”というものを生の視点から、最も自然な視点から、日々の生活の視点から、そしてあらゆるものの最も輝かしい視点から描いている」と語る監督は、音楽について「後に参加し、私たちをガリシアへと連れて行ったカルロス・ヌニェスと彼の一行は、最後の曲を真の賛歌へと生まれ変わらせました。生命の賛美です」と強調する一方、「私は人間そのものや、生きる意味を与えるもの、そしてその意味を引き裂くもの、つまり死に興味があるのです。ラモンを“腰抜け”だとか、“連帯責任の意味を知らない”と言うならば、それは彼の自由の権利を理解しようともせず、自分勝手な判断を下しているのです。“勇敢”という言葉を誰かに当てはめるとするならば、ラモン以上に適当な人はいません。『海を飛ぶ夢』が第一に描いているものは、旅です。生と死への旅。それはガリシアへの旅。海へ、そしてラモン・サンペドロの中に広がる世界への旅なのです」と説明する。

ラモンの「生と死への旅」を描こうとする監督は、その「旅」を肯定することにおいてラモンの死をも肯定しているように、したがって安楽死容認に傾いているように感じられるが、おそらくそうではなく、「彼の自由の権利を理解」するのと同じくらいに、彼の「生と死への旅」を理解しようとしているのだ。もし理解できるなら、彼の死に肯定的であるか否定的であるかは、ほとんど問題にならないということかもしれない。だから、《アメナーバル監督は、ラモンと周囲の人々を等身大に描くことで、安楽死容認の是非に自ら答えず、見る者に考えさせようとした。それこそ、この映画が心に訴える理由であり、芸術作品としても長く記憶されるものとした理由だろう。日本でも「寝たきりになったら安楽死したい」という声はよく聞かれる。だが、ラモンのように闘う覚悟はあるだろうか。家族を傷つけても死を選ぶ自己はあるだろうか》（三井美奈）という評価は、首肯できなくはない。

しかし、ここで立ち止まってしまうのは、はたしてラモンの「生と死への旅」にどこまで我々の理解が及ぶのかであり、監督が《見る者に考えさせようとした》として、我々はどういうにして考えることができるのかということである。ラモンと同様に事故などで体が不自由になった中途障害者たちが、この映画についての感想を次のように述べている。「あれだけ愛されていても障害があったら“尊厳”がないのかねえ」といぶかしげに口を開くのは、14歳で体育館の屋根から落ち、ラモン以上の年数を車いすで過ごす43歳の男性。

「この人、楽しいことが何かわからなかったのかな」と不思議がり、「女の人にも誘わ

れているのに勇気なかったのか。その気があれば、法廷だけでなくどこへでも車いすで行けたはず。結局、自信ないんやで、この人」と、16歳から車いすの男性。

「『死にたい』はないが、消えてしまいたいと思うことはある」のは、「パチンコに負けた時。でも、勝つとそんな気なくなる！」から、「ささやかな出来事に一喜一憂するのは健常者と同じなんですよ」と、29歳の男性。

「死にたいと思うことはあるけれど、健常者もそうでしょう？ 私たちの現実、毎日戦争みたいに忙しく、死ぬことを考える暇はない」と、脳性まひで重い障害を抱える46歳の女性。

以上の感想を掲載している05・5・2付朝日は、《主人公が死を選ぶ結末には、憤るというより、解せないという反応ばかりだった》と記し、西宮市の障害者生活支援センター「のまネット西宮」のセンター長(51)は、《「障害は常に不幸の象徴として描かれる。その前提から疑うような映画だったらおもしろいのにと残念がる。問題提起しようという意図は買うが、死を望む主人公の考え方に寄り添った構成になっていることが「あんな体では生きていても仕方ないという価値観を強化しそうでちょっと怖い」》と懸念を表明し、監督が健常者であることから先の43歳の男性が、「健常者は障害に対してあれもこれもできなくなる、という負のイメージしか連想できないんでしょね」と話し、「自分もけがした時は、すぐにそう思えたわけではないけど、階段を自力で上がれない不自由なんて、エレベーターという代替手段で解決する。障害を負ったことで人生を揺さぶるような体験ができたりするのは、そんな小さなマイナスに置き換えられない。それが実感できない健常者の方こそ、かわいそうに思ってます」と力強く語る言葉を取り上げている。

障害者たちが映画のラモンの自死に一樣に共感せず、障害者になれば、なるほどいままでのような健常者としての生活はできなくなったが、その代わりに障害者としての生活が新しく始まることになる、その切り替えに時間はかかるが、健常者であれ障害者であれ、人間として自分の生涯を生きていくことには変わりはない、という毅然とした言葉を目にすると、健常者の障害者に対するまなざしの傲慢さ、歪みを大きく被っていることに気づかされ、ラモンの死をなにげなく受け入れていた自分の根底が深く揺さぶられつつあるのを感じる。

「老いる準備 介護すること されること」を刊行した上野千鶴子が(『Yomiuri Weekly』05・5・1)で、「戦後の男女平等の中で自立というと、経済的自立が第一でした。ジリツジリツと言うが、なんかおかしいなという違和感があった。それがふっと腑に落ちたという感じなんですね。そうか、一人で生きなくてもいいんだ。人に助けてもらってどこが悪い。誰にも助けてもらえないような自立よりは、助けてもらえる誰かを調達できる豊かさのほうがもっといいじゃないか」と語り、「死ぬに死ねない人生をゆっくりと死ぬまで生きていくんだと覚悟するしかない。イヤな言葉は尊厳死。すごく傲慢だと思う。尊厳と生とどっちが大事か聞きたい。生より尊厳が大事だとして、尊厳なき生は

抹殺しようというのが尊厳死。生は、どんな生だろうが生それ自体が尊厳。死に尊厳はない」と明快に言い切る。《男の自殺者は女より多く、40 - 50歳代では女の4倍になる。男は老いより死を選ぶ傾向があり、「だから男はひ弱なんです」と、上野千鶴子は映画のラモンに聞かせるかのような言葉を投げる。

ラモンが死を望むのは、身動きできる可能性を奪われた状態で生き続けることにあまりにも人間としての尊厳が感じられず、自分には耐えられないという理由からである。もちろん、寝たきり状態とはいえ、車椅子に乗れないわけではない、そんな障害者生活に人間としての尊厳が感じられないとみなすのは彼自身であって、「生は、どんな生だろうが生それ自体が尊厳。死に尊厳はない」という考えを彼は受け入れないということだ。つまり、障害者生活に人間としての尊厳があるかないかは、当事者が決めることであって、彼以外の第三者が決めることはできない。障害者生活を送らざるをえなくなった本人が、自らの障害者生活にも人間としての尊厳があると思えるなら、そのようにして生きつづけるだろうし、逆に人間としての尊厳が感じられなければ、そんな障害者生活にピリオドを打って、死ぬことこそに尊厳はあるということになるだろう。

明白なことは、事故が起きてから26年間、ラモンは遂にどのような状態の生にも尊厳はあるという考えには至らなかったことだ。そんな考えがあることは認めるし、その考えに基づいて障害者としての生を全うする者もいるだろうが、自分には耐えられないということである。おそらくこの問題は健常者であるか、障害者であるかといった区別を超えている。健常者だって、自分の生活に人間としての尊厳が感じられるかどうかを問われても、口ごもる人が多いだろうからだ。どのような状態であれば「人間としての尊厳」が感じられたり、感じられなくなったりするのか、そのことに基準はないし、本人がどう思うかに多くを委ねられていることが問題の見極めを困難にしている。

自分の今の生に耐えられないというラモンに共感を寄せる点があるとすれば、それは一点である。自分の身体は自分の喜びを感じることができなくなってしまうということだ。自分の身体せきりょうにおいて充実した生を求めることが二度とできなくなってしまう、という彼の寂寥感や絶望の深さはわからなくはない。若さの絶頂期の25歳に事故に直面したのだから、尚更、生を燃焼し尽くすという思いに焦がれるのかもしれない。そうであるなら、自分の喜びを受け入れることができなくなった自分の身体は苦痛だけでなく、その身体から解放されることが唯一の望みとしてみますます昇華されていくことになるのかもしれない。身体的存在としての自分に全く生の価値が見出せなくなったとき、身体的存在の外に自分を置くことを夢想するようになるのは必然なのだろうか。

91年4月に東海大学病院の医師が、入院中の末期癌患者に心停止を引き起こす塩化カリウム製剤などの薬物を注射し、死亡させた事件で、意識不明の患者に生前の意思表示がなかったことが争点となった。95年に横浜地裁で有罪判決を行った裁判官は、安楽死についての四原則を提示した。死が避けられず、死期が迫っている患者に耐えがたい肉体的苦痛がある 患者の肉体的苦痛を除去緩和するために方法を尽くし、

ほかに代替手段がない 生命の短縮を承諾する患者の明示の意思表示がある というものだが、一審の有罪判決が確定したことで、この四原則は日本の司法と検察における事実上の安楽死容認基準となったが、それはもちろん、日本国内に限定されている。この安楽死四原則が孕む問題について、宮台真司は「オン・ザ・ブリッジ」(『ダ・ヴィンチ』05・6)で次のように整理する。

《第一に、患者の自己決定権は医者に義務を生じさせる。四条件を満たせば医者は死なせる義務を負うのか。負わないなら医者が拒否した時に患者の権利はどうか。

第二に、緊急避難の法理(刑法37条)は、第三者の法益を犠牲にしても保護される自己または他者の優越利益を規定する。だが安楽死の場合、37条で規定された優越利益も、犠牲にされる第三者の法益も欠く。厳密に考えれば現行法の枠組を逸脱することは明らかだ。

第三に、患者の自己決定権を認めつつ、先進各国で万人に認める治療拒否権を「末期患者にだけ」限定するのは法の下での平等に反するし、「肉体的苦痛に満ちた」末期患者にだけ積極的安楽死を認めるのも法の下での平等ならびに刑法13条の通説的解釈に反している。

こうした齟齬を解消しつつ安楽死を容認しようと思えば、当事者が自らスイッチを入れられる安楽死マシンを開発する必要が出て来るし、安楽死四条件よりも軽い基準で安楽死を積極的に容認するような法律の制定が必要になる。だが自殺の容認とどこが異なるのか。

現に諸外国では、末期患者でなくても(第一条件緩和)、肉体的苦痛がなくても(第二条件緩和)、本人意思で安楽死を認めるべきか、あるいは本人が意識不明でも(第四条件緩和)生前の意思や家族の証言による推定意思で代用できるか否か、が激しい議論の的だ。

象徴的なのが安楽死マシンの考案者ケボキアン。90年代から98年までに130人の安楽死を手伝って自殺幫助容疑で4回起訴され、いずれも無罪となった。4回目の判決後にはNHKが特集番組も流した。98年にミシガン州法で自殺幫助を処罰する新法施行の直後、安楽死の模様をCBS系列で放映。殺人容疑で起訴され、99年に禁固10～25年の判決を受けた。》

植物状態の女性の尊厳死を認めるべきか否かをめぐって、延命措置の停止を求める夫とそれに反対する両親が対立し、ブッシュ大統領も巻き込む法廷闘争の末、米最高裁が尊厳死を容認し、今年の3月31日、栄養補給チューブを外されて死亡したシャイボさん尊厳死問題にも言及しながら、《公式には「死の自己決定権」の観点から消極的安楽死にも積極的安楽死にも賛成する立場》をとる宮台真司は、《安楽死を禁じると、人道的な問題を生じ、幸福追求権に反する。だが安楽死を認めると、法の下での平等に忠実たらんとする限り、末期患者でなくても肉体的苦痛がなくても自死を認める方向にならざるを得ず、自殺の容認に近づく。そのことにシコリを感じる。なぜか》と問う。彼の「シコリ」は、《先のNHK番組でケボキアンの発明した安楽死機械のスイッチを自分で入れる直前の患者たちの証言ビデオが流されたときに、決定的になった》という。

《健康上のハンデを負うことを条件に、末期患者でなくとも肉体的苦痛がなくても自死

を認めること》には、自死を認めてほしいという本人の主観的主張の尊重以外の理由はどこにもみられない。自分の手で自死を決行できないから、つまり、自殺が封じられているから、自殺が可能となる条件ないし環境をつくりだしてほしいという主張の尊重を願っているということだ。もっとあからさまに言えば、自分以外の者によって遂行される自殺を尊重してほしいということになる。宮台真司はおそらく、この匂いをNHK番組での証言ビデオに嗅ぎ取ったのだ。自死直前の患者たちは《思いを数限りなく反芻してきたからだろう。そこでは死への思いが淀みなく滔々と語られる。それはある意味で説得的である。／だがそうであるほど、私はそこに強い主観性ないし抒情性を感じ取る。

「不安ゆえの高度な主観的構築」を見出し、ゆえに「別様の主観的構築の可能性」の所在を嗅ぎ取る。分かりやすく言えば、全く違った仕方ですべて世界を体験する仕方はないか、と思うのである。》

自死を願う患者たちが《死への思い》を《淀みなく滔々と語》るのは、当たり前である。《死への思い》がいっぱいいっぱいであるからこそ、自死を願って止まないのだ。いうまでもなく《死への思い》のなかでは生への思いは顧みられることはない。いま生きている状態にあることは排除されている。《死への思い》だけでいまを生きているのだ。自分の手で死ぬことができるなら、疾っくに死んでいるのに、それができないから辛いのであろうが、だが逆に自分の手で死ぬことができないから、より一層《死への思い》も募ってくるかもしれない。主人公のラモンも自分の手で死ぬことができない状態に置かれているからこそ、その状態からの解放を願って自死に焦がれているかのようにみえてくるのだ。なぜ、自死を望むのか。自死が阻まれているからだ、という問答へとどうしても行きついてします。少なくともこの映画では、自死が阻まれている状態の復元に「尊厳」という言葉が被せられているようにみえるのは否めない。

「尊厳死」とは、文書で延命治療の拒否を表明している場合などに患者のその意図を尊重して、人工呼吸器などの延命措置を止め、自然なかたちで死を迎えさせることであり、薬物などを投与して積極的に患者を死なせる「安楽死」とは区別されるが、映画の主人公のように延命治療を施しているわけではないのに、寝たきり状態にあることが人間の尊厳を損なっているという理由によって、「安楽死」を患者が求める場合にも「尊厳死」と呼ばれることがありうる。前述したように、寝たきり状態にあることが人間の尊厳を損なっているか否かという判断は、極めて主観に属する。更に、そのことによって「安楽死」を求めることが、人間の尊厳の回復になるのかどうかも全く主観的である。結局のところ、死にたいと思っているのだから死なせてほしい、という主観的な願望に尽きる。宮台真司の感じる「シコリ」は、そこに発生する、「人の尊厳は主観性に宿るのか」、と。

《実際巷には「主人公が自死する理由が説得的に描けていない」として、この映画を評価できないとする者が少なくない。彼らの多くは、おそらく私と同じように感じたのだと思う。ならば、主人公の動機を説得的に描けば、映画はもっと感動的な傑作になったのだろうか。

違うと思う。感動的な凡作になっただろう。むしろ、この作品は敢えて、主人公の主観性を前面に押し出すことによる観客の違和感を、狙っている。そのことによって、観客たちにある種のシコリをお土産代わりに持ち帰ってもらうことを、明白に意図している。

例えば、映画の前半、テレビで見た主人公ラモンの姿に感動した女工ロサが、ラモンを訪ねて来て《人生が生きるに値することを伝えたい》と言うのに対し、ラモンが《僕をダシにして自分に価値を見出したいだけだ》という具合に、滔々と反論するところがある。

一部同感しつつも観客は微妙な感覚を抱くだろう。彼は恐らく似たセリフを幾度も投げかけられてきて、その度に同じように反論してきた。だから自動機械のように反論がよどみなく口をついて出る。哀れなるはロサなり - 。これは、明らかに意図的な演出である。》

私の感想は少し異なる。監督がラモンの著作について、「この本には「生と死」に関する深い哲学がこめられていた。そして、生から死へ、「一線を越えたい」と言う彼のメッセージが伝わってきた。この本はどれだけ自分の人生を愛しているかを人々に問いかけてきた」と語り、また映画音楽について最後の曲は「生命の賛美です」と述べる一方で、「ラモンを「腰抜け」だとか、「連帯責任の意味を知らない」と言うならば、それは彼の自由の権利を理解しようともせず、自分勝手な判断を下しているのです。「勇敢」という言葉を誰かに当てはめるとするならば、ラモン以上に適当な人はいません」と強調するのを見ると、監督はラモンの主張や、彼が自死を決意するに至った哲学や世界観の理解に努めるところに映画を置いている。したがって、ラモンの「「生と死」に関する深い哲学」を理解せずして、彼の自死の切なる要求を理解できないという立場に立っている。要するに、映画はラモンに肩入れしているようにみえる。

もちろん、監督が賛美しているのは「生命」であって、「死」ではない。だが、生と死は対立しあっているわけではない。生のなかに死は深く含まれているし、生と死は互いに見詰めあっている。だから、彼はラモンがどれほど深く死を見詰めながら、30年間を生きてきたのかに感銘するし、限りなく「自分の人生を愛している」が故に、最後の自分の意志において自死を望むという逆説が生まれてくることも洞察している。つまり、死にたいが故に自死を望むのではなく、生きようとするが故に自死を希求するといった気持が突き上がってくる。生命体が死にむかって生きるものであるなら、人が生にむかって死んでいくということも起こりうるのではないか。自分の意志が剥奪された状態での朽ち果てていく生の存続に対して、もはや自死にしか自分の意志が関与しうる領域は残されていないという深い嘆きがラモンからは聞こえてくる。

「私だ」と主張することのできる身体を自分は失ってしまったのだけれども、もはや自分のものとはいえない身体はだが死んでいるわけではなく、生命を保持している。確かに自分が自由にコントロールできる身体的存在としての自分は失われてしまったかもしれないが、自分の意志が関与しうる領域が身体的存在以外にも失われているわけではない。宮台真司も言うように、《主人公には文章を書く才能がある。想像の中で海と戯れる才能がある。軽妙なジョークで人を魅惑する才能がある。その才能に周囲は魅惑され

る。なのに主人公は自死直前のビデオ証言で《私の人生は尊厳とは無縁でした》と告白するのである。／常人にない才能を持ち、常人にあり得ないほど愛されているが、しかし主人公は「自分らしく生きられない＝尊厳がない」と感じる。観客は困惑する筈だ。これで自死を容認するのなら、寝たきりの病人や老人は全員自死の資格を持つことになるではないか、と。》

そう、《寝たきりの病人や老人は全員自死の資格を持つことになる》のである。そして、ラモンと同様に自死を強く望み、手を貸してくれる者が出現しさえすれば、自死は成就されるのだ。他人の手を借りた自殺に限りなく近づく。《常人にない才能を持ち、常人にあり得ないほど愛されているが、しかし主人公は「自分らしく生きられない＝尊厳がない」と感じる》のは、これだけ恵まれているからこそ、ベッドの上で身動きできない状態に置かれていることが、ますます納得できなくなるし、耐えられないということかもしれない。《常人にない才能を持》っても、常人にある自由な身体的存在が奪われていることのとてつもない落差のどこに、人生の尊厳があるのかという主張が響き渡ってくる。そうすると、ラモンにとって残酷なのは、寝たきり状態にあることではなく、想像の中で「海を飛ぶ夢」を何度も見ることで寝たきり状態との落差であるかもしれない。しかし、「海を飛ぶ夢」は彼が寝たきり状態にあるからこそ、何度も募ってくる思いであることもいうまでもない。

何度も「海を飛ぶ夢」を見ることによって、ラモンは遂に本当に「海を飛ぶ夢」を成就したくなった。もちろん、その夢は寝たきり状態になくても叶えられる夢ではないし、寝たきり状態から湧き起こってくる夢であるが故に、彼は「海を飛ぶ夢」に自分を運ばせたくなった。その思いは自死に向かっていくとしても、彼からすればあくまでも「海を飛ぶ夢」の成就にあるのであって、自死そのことにあるわけではない。死ななければ夢を成就できないのであれば死んでもかまわないとしても、他からみれば死ぬことは死ぬこと以外のものではなく、「海を飛ぶ夢」の成就を叶えられる筈もないことは明らかである。彼は自死を覆い隠すために敢えて嘘をついているようにみえるとしても、その嘘が寝たきり状態から生みだされた本当の嘘＝真実であったなら、その嘘の成就＝自死のために自分の意志を最大限発揮していく欲求に駆られることは、それほど異なことであるとは思われない。

監督は、「生から死へ、“一線を越えたい。”という彼のメッセージ」の中に、「海を飛ぶ夢」へのラモンの思いを生の充溢としての生の逸脱として受けとめようとしたにちがいない。だが彼の「“生と死。”に関する深い哲学」が、寝たきり状態の苦痛からの自死の叫びとしかみえない人々に理解される筈がなかった。「人生が生きるに値することを伝えたい」という口サは、そのような人々の中からやって来たのである。映画では、口サは善意にあふれた無理解な人々のお節介の典型として描写されている。口サの善意を受け入れないラモンの前で彼女が撤退すれば、ラモンの自死を手伝うか細い途は断たれてしまう。ラモンの切なる熱い思いを身近でよく知っているからこそ、彼の自死に手を

貸せない兄嫁にしても、自分の不治の病に彼の自死への思いを重ねて、彼の自死に手を貸そうとする女弁護士にしても、ラモンへの共感に立っているが故に、彼の自死に手を貸す行為から逆に遠ざけられてしまう。最も無理解なロサがラモンの自死に手を貸す最大の理解者として現れるところに、映画の眼目も見出される。

《自死を望む者の主観性を前面に押し出し、観客の違和感を誘い出すことで、何が可能になっているだろうか。》登場人物による《主人公を翻意させようとする試みが、主人公の主観性を拒否するがゆえにこそ尊厳の侵害であり、同時に、愛する者ならばこの主観性を丸ごと肯定するべきだ、とする主人公自身の主張にも意味が与えられる。さて、観客はこれに同意するべきなのか。》ロサにはラモンの哲学がよく理解されたから、彼の自死に手を貸すというようには描かれていない。《主人公のことをよく知らなくても、あるいは知ろうとして理解できなくても、主人公の主観を - それがどんなにありそうもない構築であろうと - 尊重》することによってしか、要するに、《理解できなかったにせよ、いや、理解できなかった上で「あり得ない思い違いだ」と感じたにせよ、それでも他者の主観性を尊重することこそが、尊厳に敬意を払うことになる - 。この主張は明らかにシコる》と、宮台真司は繰り返す。《主観性を尊重するがゆえの自死の許容が、主観性を生きる身体の消滅を帰結する》ことに、「シコリ」は収まらないのだ。

主観性の尊重は主観性の否定の尊重になってしまうということだが、このことは自分の意志に属さなくなったからといって、自分の「身体」の生命を拒否することは「私」に可能かという問題でもある。そう、自分の意志に属さなくなった自分の「身体」の生命に止めを刺すために、自分を「神」の位置にまで奉らなくてはならないか、そんな欺瞞を冒さなくてはならないか。主観性を否定するための主観性を突出させて、行使しなくてはならないか。ラモンを愛するなら彼の望みを叶えてやらなくてはならない、彼の望みを叶えずに彼を愛することはできない、という考えに達してロサは彼の自死に手を貸すことになったが、もちろん、この考えは愛する者の消滅に手を貸すという、つまり、愛する者が自分の目の前から消えていなくなることを望むという、アンチノミー（二律背反）に見舞われている。

《映画はこのアンチノミーに自覚的だ。だが映画を評するこの国の言葉を見る限り、アンチノミーには鈍感だ。そもそも主観性がそんなに重要か。人の尊厳は主観性に宿っているのか。そういう反問があってこそ、私の公式的立場の「仕方なさ」の深さが際立つのに》と、宮台真司は結ぶ。尊厳とは生きることの内に訪れるものであって、自死が人生の尊厳を喚び起こすことはどうみてもありえないだろう。生の尊厳を否定する自死が「尊厳死」と形容されること自体、矛盾にほかならない。ラモンの自死に共感する点を見出すなら、唯一、「自分を始末する」潔さであろうか。人間の尊厳なぞこれっぽっちも感じられないような人間の生きかたのおぞましさを予感しながら、だからこそそんな「海を飛ぶ夢」を遠くに見ようとする。

2006年1月21日記